

# OKEN

# 桜建会報

2018-March No.111

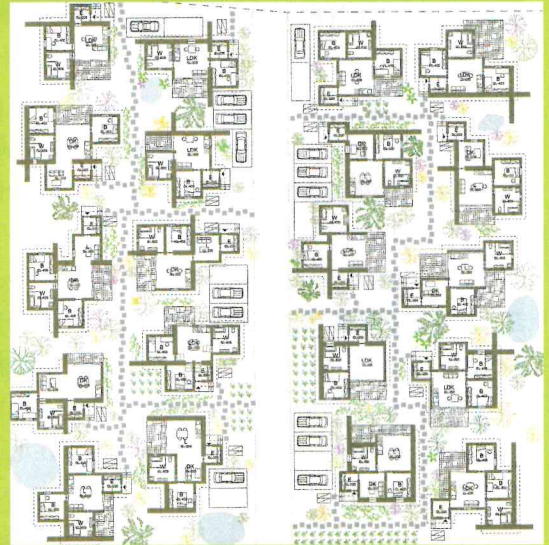
日本大学桜門建築会

<http://www.okenkai.jp/>

第8回学生設計コンペティション受賞作品



優秀賞「歩む住宅」井上了太・内海龍太・北村海斗・鈴木海士



最優秀賞「百年復興住宅」佐藤千香・藤井将大・横山大貴



優秀賞「よらっしやれ栄村」北嶋晃大・砂古口真帆・廣田龍平

## contents

トピックス◎第8回日本大学桜門建築会学生設計コンペティション結果報告——2

研究室紹介◎コンピューテーション応用力学研究室 廣石研究室——5

短期連載◎さよなら5号館 第2回 批評、環境、構造のことば——6

斎藤賞・加藤賞・桜建賞 2017年度受賞者一覧——10

オール日大建築系 2017年度授与賞・受賞者一覧——12

事務局だより——14

学部ニュース——15



## 第8回日本大学桜門建築会学生設計コンペティション結果報告

テーマ●「災害復興住宅(群)」を考える

2017年12月2日(土)に、日本大学の各学部、大学院の在学生を対象とする「第8回日本大学桜門建築会学生設計コンペティション」の第2次公開審査が、理工学部1号館CSTホールのホワイエで開催された。今回の審査員には、理工学部と大学院理工学研究科で非常勤を1996年～2006年まで務められたこともある建築家の飯田善彦さんを迎えた。

## 参加条件のハードルが高い理由

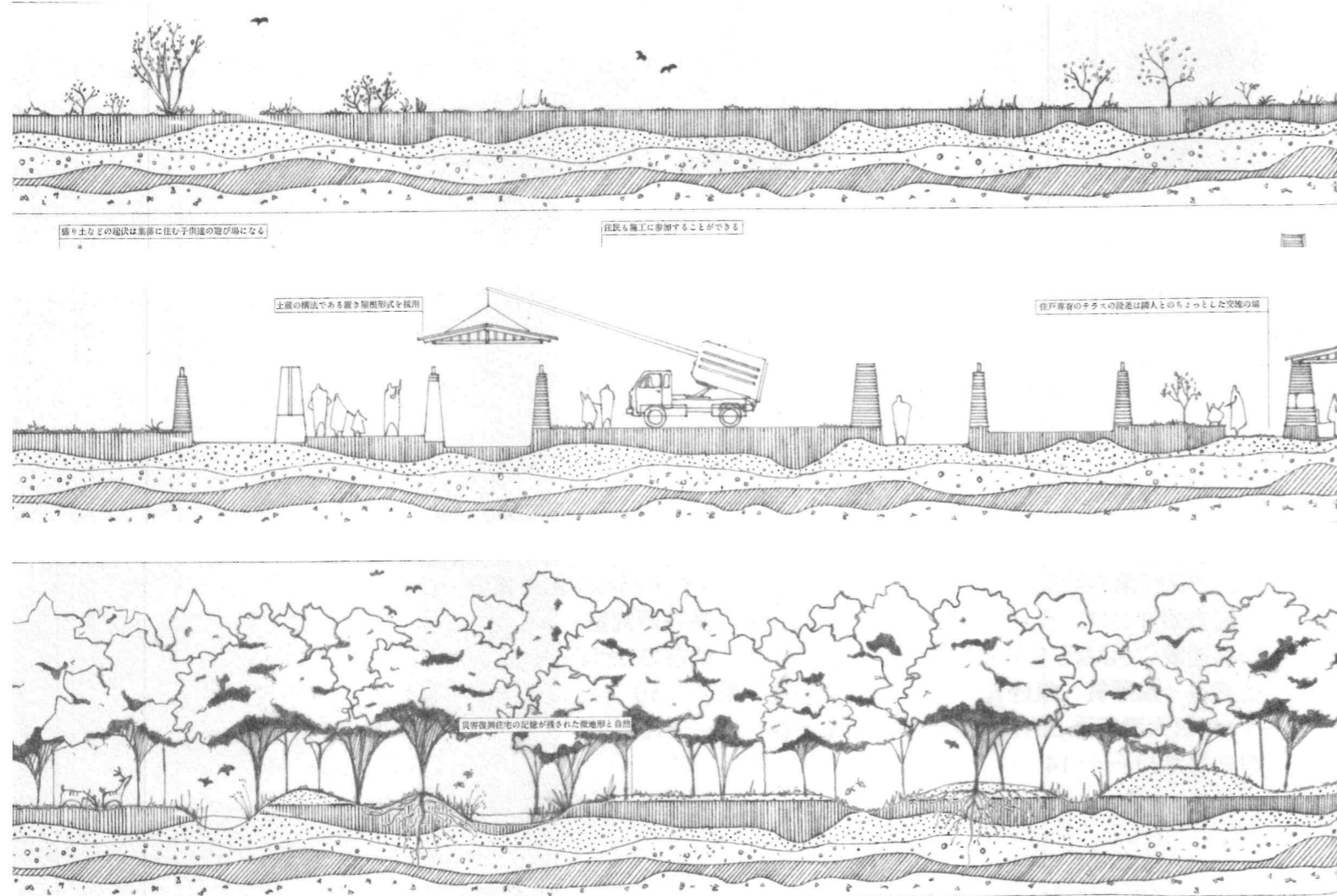
第2次公開審査に先立ち、7月18日(火)の公開レクチャーの中で、今回のコンペの課題『「災害復興住宅(群)」を考える』が飯田善彦さんより出題された。この出題主旨は、「自身の体験を通じて建築を考えてほしい」という想いに集約される。そのため、現地に赴くことがコンペの参加条件として課された。その上で、仮設住宅ではなく、恒久的な住まいとしても位置づけられる「災害復興住宅(群)」の提案が求められた。そ

の理由は、飯田さん自身が仮設住宅の提案を重ねながらも実現できなかった経験から、仮設住宅よりも災害復興住宅に建築家として応える余地が多いと考えているためであった。

飯田さんの恩師であり、筆者の恩師でもある高宮真介先生の「東日本大震災の直後は建築家として応えられることがあまりに少なく絶望した」というコメントが頭をよぎる。スライドでは、東京の郊外のような平坦な造成地、海が見えない防波堤、生活の手がかりが漂白されたような住

## 最優秀賞

「百年復興住宅：熊本県西原村古閑地区における版築構法を活用した震災復興の提案」  
佐藤千香・藤井将大・横山大貴



左/7月18日、飯田氏の公開レクチャー。右/第2次公開審査風景。発表しているのは横山君

宅、コミュニティの断絶を想像してしまう新築の災害復興住宅など、見る者に現実をつきつける風景が映し出された。「これらすべてを解決するような社会を構想するべきだが、建築で提案できることは小さなものでしかない」と、行きつ戻りつ飯田さんは語られた。大きな課題解決へ向かう第一歩として、集まって住む意味を考えてほしいということが、(群)というタイトルに意図されていることも語られた。

## テーマ設定は身体感覚の拡張

筆者自身は飯田事務所で20代を6年弱過ごした。その経験から、課題設定の意図には、飯田さんの建築観が反映されていると思う。ウェブで検索すれば多くの情報にアプローチできる一方で、現地に赴き、生きた情報に触れる機会を失っている現実がある。このような便利さから身体感覚が失われていくことに無意識であることは、建築をつくる人間として最大の欠点ともなる。その危機感が参加条件に含意された。

今回のコンペへの参加を口実に現地へ赴き、それぞれの立場から現地で感じたことを、第2次公開審査に進んだ全員は口々に話した。そ

の点だけでも、このコンペの目的は十分に達成できたのではないかと思う。もちろん、身体感覚とは、美しい建築をつくる感覚だけではない。

震災と身体を接続して考えるならば、レジリエントな身体であり、死なないための行動、生き延びる知恵であろう。この身体感覚は日常にも潜んでいる。例えば、プロジェクトにおけるリスクを察知・回避する能力も身体感覚から呼び起こされる。

飯田さんは、建築家の使命が国家建設という大きなところから、個人を主体とした民主化に力点を置きはじめたところに建築家となった人である。いわゆる地盤や看板をもたない、人間味だけで評価された建築家である。それを支えた能力のひとつは、リスク回避と正しい判断の積み重ねであることは、メディアからの情報だけではわからない、素顔の一面である。

## 7組が賞を受賞した

第1次審査で通過が決まった7組が、第2次公開審査でプレゼンテーションを行った。審査の結果、7組全員に賞を与えることとなった。最優秀賞として「百年復興住宅：熊本県西原村古閑地区における版築構法を活用した震災復興の提案」佐藤千

香・藤井将大・横山大貴(理工建築MI)が選出された。

優秀賞の2点には、「歩む住宅」井上太・内海龍太・北村海斗・鈴木海土(生産工1年)および「よらっしやれ栄村 真白き世界に隠された知恵」北嶋晃大・砂古口真帆・廣田龍平(理工建築3年)が選出された。

準優秀賞の2点には、小川朋大・亀田真徳(理工建築3年)および作山和輝(工建築MI)、佳作の2点には、飯嶋貫太・市ノ川貴之・伊東亮祐(理工建築MI)および稲庭香歩・中村直・宝迫嘉乃(理工建築MI)が選出された。

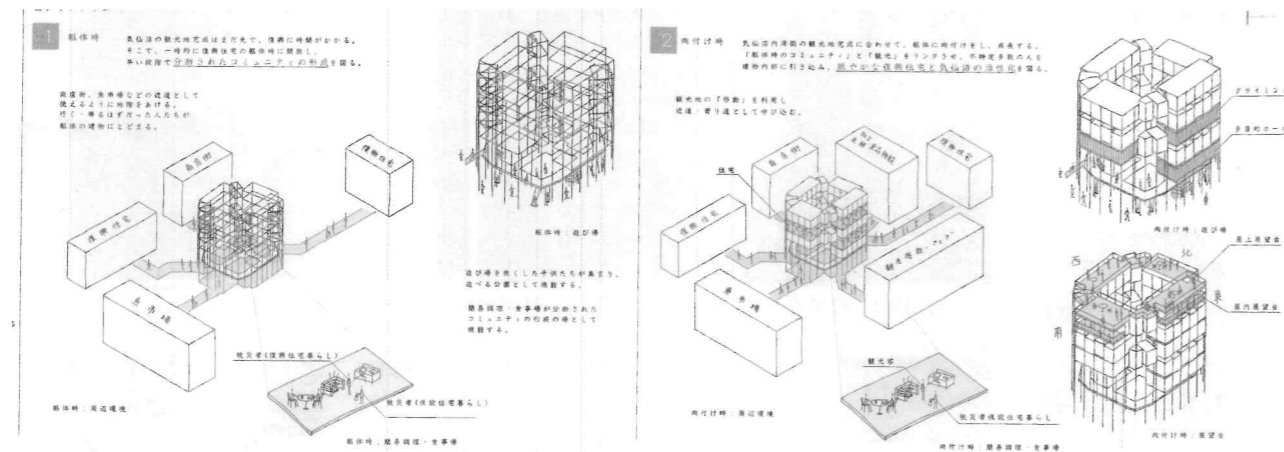
第2次公開審査に進んだ全員に賞が出たのは、現地へ赴く必要があったことから、交通費の足しにしてほしいという飯田さんのほからいでもあり、コンペに対する応答それぞれに可能性があったこともこの結果につながった。

## 各組の提案について

物量的には足りている今日において、必ずしも建築を建てる理由が見当たらない状況に生きながら、震災により断絶した場所に新たに建築をつくる理由を見い出せた提案はあっただろうか。

最優秀に選ばれた作品は、選択し

# 優秀賞 「歩む住宅」 井上太・内海龍太・北村海斗・鈴木海土



## 優秀賞 「よらっしやれ栄村 真白き世界に隠された知恵」 北嶋晃大・砂古口真帆・廣田龍平



た技術(版築)と朽ちていく風景の接続に納得の高さがあった。優秀賞のひとつ「歩む住宅」は、学部1年生でありながら、大人びたドローイングに圧倒された。観光が集まって住む意味の接続や、平面や断面計画の破綻が解決されていれば、最優秀賞の可能性があった。優秀賞のもうひとつ「栄村」は、非常にいいなりサーチをしており好感がもてるものの、提案している住宅が栄村

でなければ成立しない自立性に対する説明がもの足りなかった。その他にも、現地のリサーチがていねいに行われているものの、あまりにも現実の問題に没入しすぎたために射程の長さに関する目標設定が弱いもの。戦略的に集まる手がかりを非建築で提案したが、建築に対する悲観的な態度が生々しいままで、批判的な行為に消化しきれていないものなどがあった。

いずれの提案もこちらの想像力を掻き立てるものであり、受賞できたことに自信をもってもらいたい。参加した学生には、コンペは思考実験として最高の場であるし、ビジョンを建築により示すことができるのは、建築をかたちづくることの醍醐味であることに気づいたはずである。今回の経験を、次につなげていってほしい。(二瓶士門/理工学部建築学科助手)

### 審査結果

応募総数 9 点  
内訳/理工建築 2 点、理工海建 2 点、生産工 1 点、理工建築学専攻 3 点、工建築学専攻 1 点 (昨年度応募総数は 38 点)

### 研究室紹介

#### 研究テーマ

#### 免震基礎工法

地盤を含めた建物の構造解析、特に耐震・免震について計算力学を用いて明らかにするとともに、地震に強い安全な建築物かつ定量的な評価方法を研究する

#### 研究室名

コンピューテーション応用力学研究室(ブンタラ研究室)

#### 教員名

教授・Buntara S.GAN

#### キーワード

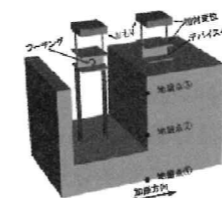
住宅基礎/軟弱地盤/構造と地盤の相互作用/定量的評価免震/鋼管杭/震度階級

#### 企業等への要望

共同・受託研究の要請 実作・試作等の協力 研究成果の事業化等  
新商品研究開発、産学官連携による地域活性化、耐震解析のコンサルティング、実証実験等

#### 研究概要

免震といえば、超高層ビルの地盤に積層ゴムを施す工法で、免震効果を発揮することが知られています。一方で、積層ゴムを設置するだけで戸建て1軒分の費用がかかるため、一般住宅には不向きです。特に軟弱地盤上で住宅を建設する場合、住宅の耐震性を上げて頑丈な造りにしても、軟弱地盤に対する地盤改良が十分でなければ、大地震の際に揺れが大きくなり、場合によっては倒壊の危険もあります。



「免震基礎工法」は、特に軟弱地盤の上に建つ戸建て住宅に対して、軟弱地盤の下にある固い地盤まで鋼管杭を打ち込んで固定し、その杭で住宅の基礎を支えるという工法です。



本研究室では「免震基礎工法」について解析を行うとともに、免震効果を定量的に評価して、例えば「震度6の地震がきたら、免震基礎工法であれば震度3に軽減できます」など、気象庁震度階級を用いてわかりやすい評価方法を提案しています。ユーザーにとっても工法選択の判断材料になると思っています。

杭基礎免震基礎工法(解析モデル・実証実験)

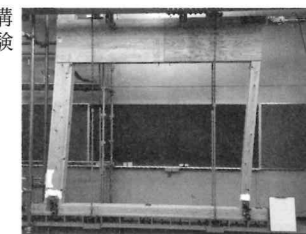
連絡先◎工学部建築学科 郡山校舎16号館206号室 Tel.024-956-8735 E-mail buntara@arch.ce.nihon-u.ac.jp

#### 研究テーマ

#### 木質構造による建築空間の可能性

—木質構造や木質材料の構造性能評価—

木質ラーメン架溝の水平載荷試験



#### 研究室名

廣石研究室

#### 教員名

助教・廣石秀造

#### キーワード

木質構造/木質材料/木材利用/構造計画・設計/空間構造

#### 企業等への要望

共同・受託研究の要請 実作・試作等の協力 研究成果の事業化等 その他

#### 研究概要

本研究室は木質構造および木質材料を主な研究対象として、耐震性能の評価や木材の利用促進につながる新しい構法の開発などに取り組んでいます。建築業界では今日、木質構造に注目が集まっています。一方で、木質構造は未解明な部分も多く、実建物の設計の際には実験による検証が広く利用されています。このため、本研究室では木質構造に関する基礎研究の他に、設計に対する技術支援や設計コンペへの協力も積極的に行っており、実社会に役立つ研究を目標に取り組んでいます。

これまでに、神奈川県産ツーバイフォー材の材料試験、集成材を用いたプレース部材の載荷試験、木質ラーメン架構やCLTを用いた免震床版の開発などの実績があります。また実験・研究は理工学部建築学科の空間構造デザイン研究室(岡田章教授、宮里直也教授)や免・制震構造研究室(秦一平教授)とも共同で行っており、建築空間の可能性を広げる「新しい木質構造」に向けて研究を行っています。

連絡先◎短期大学部建築・生活デザイン学科 船橋校舎9号館2階923B Tel.047-469-5389 E-mail hiroishi.shuzo@nihon-u.ac.jp



# さよなら5号館

## 理工学部駿河台校舎5号館をふりかえる

### 第2回◎批評、環境、構造のことば

今年10月から解体が予定されている理工学部駿河台校舎5号館。その意味を問い直す短期連載の第2回目は、完成当時の5号館に向けられた周囲からのことばである。建築学科の学内誌『連子』に掲載された、協力者であり、利用者でもあった教員たちの文章をふりかえてみる。なお原稿再録にあたっては、当時の文章の雰囲気を残すため、註を除きあえて原文通りとした。

#### § 5号館にみなぎる充実感

5号館は1959年7月に竣工した。その直後、同年11月発行の『連子』には、前号に掲載した宮川英二先生の「設計以後(5号館実施についての覚書)」とともに、建築評論家の浜口隆一先生(当時は客員教授)が「日大新校舎によせて」と題する5号館に対する評論を掲載している。

新しく完成した理工学部5号館は「力作」という言葉のふさわしい建築である。打ちはなしコンクリートの柱、梁の構成にみられる充実感と側面につまめた白い陶製ブロックの壁の清潔感。屋上の手摺りその他、細部にいたるまで、デザインの密度がたかい。小川町の交叉点あたりから見上げると、堂々たる印象である。

ひろびろと解放された一階玄関まわりのポーチは、いまのところ一寸無駄のようにもみえるが、これはもうすこし時をかして、学生たちによつて、ここがどのように利用されるかを見てからでないと、はつきりしたことはわからない。私としては、この空間の可能性を信じたいが……。

ここの壁面につけられた大きなレリーフは見応えがある。

コンクリートの硬い材質の抵抗感を芯として、尖つたり、渦をまいたりする複雑なフォルムがつくりだす鋭く、深い陰影は、この空間を強くひき締めている。建築と彫刻の結びつきの、数少ない成功例の一つになる

ようにおもわれる。

やや飛ぶが、似たような空間感情をつくりだしている屋上も好ましい場所である。(中略)面白い形をした丸屋根の下のベンチに腰かけて、暮れてゆく東京の街をみおろして、私は時のたつのを忘れた。校舎が高層建築になつて、その圧迫感に悩まされがちな、大学研究室のひとつにとつて、屋上はオアシスのような新鮮な息吹きをもたらしてくれそうである。

打ちはなしコンクリートの柱が、下層に向うにつれて太くなる扱いは、力学的およびビルコン的な理由に裏うちされて、この建物のデザイン的・造形表現的な著しい特徴の一つである。建物の上層部については、この扱いは造形的にも成功している。力強さとスカッとした感じがある。しかし一・二階で、グッと太くひろげたあたりは、やや誇張を感じさせる。「遅しさ」という表現かもしれないが、わざとらしいダブつきがあるような気がした。(中略)

研究室の建物の内部は、構造システムも、平面も単純率直である。空間構成のわかりやすさということは、こうした性質の建物の場合、ことに意味が大きい。移動可能を特徴とする間仕切パネルは軽快で気持ちがいいが、あの色彩計画には抵抗を感じさせるをえない。(中略)

「力む」といえばこの建物のデザインのすみずみにはそうした肩ひじをいからせた感がないこともない。「力作」という言葉を、私が使つたのも、

それにある程度示唆されてのことである。とはいつても、それはこの建築のデザインの全内容に対して、若干のマイナスであるに過ぎない。やはり全体としては、そこにみなぎっている充実感を買わぬわけにいかない。

最後に一言。

これだけの建築ができてみると、日本大学のキャンパス(校舎群が構成する学園)全般について、ふかく想いをいたすべきときがきているようにおもう。(中略)学園の将来の姿をしめすアーバン・デザイン的な総合計画をはやく樹立発表してほしいものである。

上記のように、設計者の同僚という立場であり、学内誌という媒体でありながら、正面から批評を行っている浜口先生の態度は、今でも見習うべきところが多い。

#### § デラックスな教材が完成

続けて同じ号に、近江榮先生(ペンネーム逢美栄を使用)が「身近な立場からの批評」という文章を書いている。こちらは、利用者からの視点による批評を展開している。

前掲の浜口先生の評論は、他の一般の建築作品に接するときと同じ態度での寄稿をいただいたが、私はずっと設計スタッフに近寄つた観点から、しかし飽くまで傍観者としての

感慨に浸っている、いわばウチワ同志の気楽なコミュニケーションの機会として考え、又、なるべく浜口先生の内容と重複を避け乍ら建物を外から、眺め、内に入つて住んでみて、色々記してみたいと思う。

先づこの理工学部5号館は、建築作品として日本大学に於ける建築施設の記念碑に違いないという事実を記さねばなるまい。(中略)伝統の古い建築科教室を持つ日大に学生の実地教育の意味からも是非ひとつ位は……と我々は心から渴望していたのであつた。(中略)デラックスな教材となつて身近に出現したことになる。(中略)

この建築に於ける設計態制の滑り出しは、進歩的な協同設計(議論の余地はあるが)として個々の問題についてスタッフの間でディスカッションを通して決定していく方針を採つたようだが最後迄これを徹底することは仲むずかしかつたようである。(中略)

又材料及一般構造的に格好な教材として、恐らく若い研究者及学生諸君にとつては喜ばしく、誇らしい建物であろうこと疑いない。加えて屋階の構成の楽しさと、眺望の素晴しさは深い印象を与えるものとなる。(中略)

柱、梁、腰壁部分がすべて同じテ

クスチュアのコンクリートで窓枠は軽快なアルミのサッシュ(中略)が光り輝いて確かに美しいが、全体の表情が漠然としていないだろうか。アクセントに、“素顔に口紅”程度のコントラストは欲しいような気がしてならないが側面は美しい。

#### § 賛辞をおくりつつも苦言も

グッと注意を惹く壁面一杯のプレキャストコンクリートによるレリーフがきつと視線を奪うだろう。

小野襄氏(絵画彫塑の講師)のこの力作は、プレキャストのコンクリートによる他に類例を見ないもので、作者の言によると施工に当つたみなと建材の採算を度外視した協力がなければとても出来なかつたという程むずかしい仕事だつたようだ。(中略)

ともあれ壁面一杯に溢れる造形全体としては、ホールの周囲を構成している遅しい空間に対して十分に拮抗し得ているように思う。

が私の個人趣味としてはあの壁面には可成り強い魅力的な色彩が欲しかつたような気がする。(中略)

6、7、8、9の研究室階の移動間仕切は、設計の前提としてのユニヴァーサルなスペースを適宜に区切つて使用する要求に答えるには、色もさること乍ら、音響的にも少しプライ

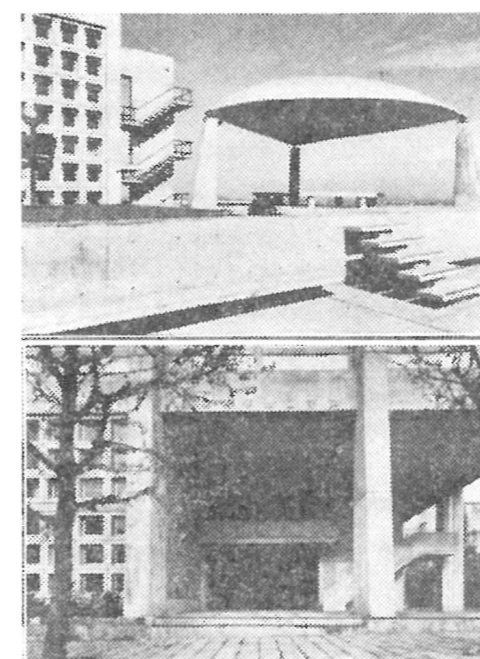
ヴァシーが保てるようにしたかつた。隣室の電話の内容まで聴取れるのは落ち着かない。(中略)刺激的な色が、扉の数が多いことから反復されて強すぎた。打放し仕上げに対抗する為に現代建築には屢々強烈な色彩が登場しているが一般的には量として僅かな面にかざられると言えよう。(中略)

茲まで書いて読み返してみたら些細なこと迄勝手な印象を失礼とは思いつつ書き連ねてしまつたようだが、傍観者としての喜びと妄言を記したまでである。

ちなみに、浜口先生、近江先生がともに賞賛している小野先生によるレリーフは、5号館の貴重な記憶として、現在建設中の「南棟(仮称)」の1階カフェに複製保存される予定である。

一方で、これらの批評に対し、次号の1960年2月発行の『連子』IV-1号では、「5号館に関する合評会、記録」が掲載されている。合評会の出席者は当時の建築学科で教員を務めていた教員たちで、設計チームからは宮川英二助教授、小谷喬之助助教授、若木滋助手、関沢勝一助手、その他に市川清志助教授、近江榮助教授、木下茂徳助教授、笠井芳夫講師、木村翔講師が出席している。

左下/『連子』(60年4月発行)に掲載された5号館竣工写真で、東側から見た1階ホール。左上/同、屋上写真。右/浜口先生、近江先生が絶賛した、現在の1階ホールの小野先生によるPCレリーフ







上/『連子』(1959年11月発行)に掲載された、5号館パーティションの組み立て工程。パイプの差し込み、間柱とパネルのセット、ネジ締めなどすべて手作業で行われた様子が紹介されている

## § 批評に対する説明と合評

はじめに宮川助教授から連子掲載の二つの前掲批評文について逐次設計者としての意図の説明があった。

浜口教授の「力む傾向」に対する懸念については、設計者側は“つとめて力まぬように意識して卒直な表現を、と考へたと述べ柱の下部のひろがりや“遅しさ、を表現しようとする意図もあったとの事(中略)

大学研究室に於ける建築家の在り方について、更には、プロフェッションの確立ということに就いて考えさせられた。さて次に、設計の協働態制に関しては、スタッフの工事経験の隔差もあり、その配置及調整に困難があったが、スタッフの意見も出来る限り採用するように努めたつもりだが、建築作品は本質的には矢張りワンマンコントロールでなければ纏まらないものだと意見であった。(中略)

何はともあれ日本大学としては記念碑的現代建築が竣工したという事実。と更にその合評会がもたれて多くの意見が提出され討論されるという好いふんいきはよろこばしく今後益々みんな育ててゆきたいものと思つた。

また、同号には、木村翔先生による「5号館の騒音調査」が掲載されている。前号の近江先生の指摘を受けて、遮音に対する実際の調査が行われたようだ。ここでも正面から5号館への批判が行われている。

5号館に新らしくできた各科の研

究室は、間仕切り壁の遮音が悪くて落ち着かないという声をよくきく。(中略)また東側の部屋では、すぐ前の道路から、自動車の走行音、排気音、警笛などがきこえてきて相当にうるさいといわれる。(中略)

研究室の許容騒音レベルとしては(中略)少くとも隣で話す人の声の意味が、わからない程度にはしたいものである。(中略)ところが実際に5号館の814号室と815号室の間で測定した遮音度(2室間の音圧レベル差)は(中略)低音部で10db前後、中音部で20db前後、高音部で25db位しかなく、人の声を遮断するのに必要な200c/sから1000c/s位までの遮音量が特に不足していることがわかる。

5号館の間仕切り壁が、このような設計の段階をへないで、只カンによって決められたことは、この建物が色々な点で新しい試みを取り入れた作品であるだけに残念なことだといわざるをえない。(中略)

次に5号館東側の各室において問題となっている、すぐ前の道からの交通騒音を調査するために(中略)騒音レベルの測定を行った。(中略)窓の遮音を増すことは、サッシュの隙間の問題と通風換気設備のとのわかないこの建物では、夏に窓を開けなければならないことを考えると、非常にむずかしいが、それにしても、最も騒音レベルの高い3階に、話を通じさせることを目的とする会議室を設け、しかも、他の部屋と殆ど同じ設計を行ったことは納得がいかない。(中略)これだけの建物をつくる際には、やはり最初から音響的に重要な部屋には、音響設計を行うとい

う、ゆきとどいた配慮がほしいものである。

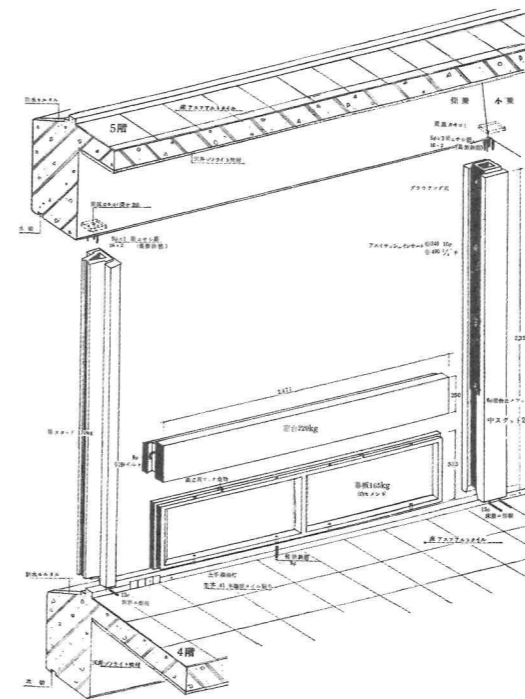
住みよい空間、使いやすい空間をつくるために、これからの建築は、増々快適な室内環境計画とそのための設計技術が必要となってくるであろう。建築家をめざす学生諸君も、この方面のことを更によく勉強しておいてもらいたいと思う。

その後、2008年に5号館は対震を含む全面改修が行われたが、その際には、ここで指摘されている部屋の間仕切りなどに対する遮音性能、窓を開閉させないことによる防音性能の十分な確保が行われた。

## § 海外からも注目

竣工後、5号館はイギリスの建築雑誌である「Architectural Review」1960年4月号に、「No.5 Building」という見出しで掲載された。

大学の新しい建物に、功労者や後援者に因んで名称を付ける代りに、単純な番号を付ける日本の習慣は、しばしば西洋の読者にとっては、大学という価値ある建物に相応しい敬意の念を与えていない、という感じを起させるようだ。(中略)「ブルータリスティック・アプローチ(brutalistic approach)は建物にブルータリズム(Brutalism)の特質を与え、その様式は蔦を壁に纏わせ、広広と芝生を植える技巧的な試みよりも都心の大学にとって一層適切である。——英文新建築 1959.6より引用」(中略)



左/『連子』(59年11月発行)に掲載された窓周りP C組み立て詳細図  
右/『土と基礎』(発行/土質工学会、60年4月)の表紙には5号館の曲板基礎配筋の写真が使われた。この号で構造を担当した加藤先生が「新しい基礎形式」というタイトルで、資料とともに論考・資料を寄稿している

それを受けて、1960年11月発行の『連子』IV—3号に、設計チームの一員であった関沢勝一先生による「Architectural Reviewに載った5号館の批評を読んで」と題する報告が掲載された。

何故A.Rが5号館をとりあげたか。それはイギリスの建築思潮と関連がある。1954年頃からニュー・ブルータリズム(New Brutalism)の問題が提示され、雑誌A.Rを中心として活発に議論された。(中略)

ブルータリスティック・アプローチ、即ちブルータリズム的創作態度が、5号館にブルータリズムの特質を与えたと述べているが、これは象牙の塔という言葉から想像される、所謂、過去の大学建築のプロトタイプから没交渉な5号館のデザイン(中略)を指しているものと考えられる。

A.Rは又、会議室をとりあげ、たくましく優雅であるとしているが、テラカッタブロックの写真を目詰める彼等、西欧人の目には、彼等が憧れる美しい日本の伝統的な障子が、いつしか重複しているのではあるまいか。

さらに同号には、同誌への設計者からの応答として、宮川先生による「5号館についてのA. Reviewの批評とNew Brutalism」が掲載されている。

私自身としても、5号館の設計で、New Brutalismの野心作をつくろうとしたのでは勿論なく、限られた条件の中で、発注者である学校当局と、利用していただく人々の信頼にできるだけ忠実に答えようと努力したまでである。したがって、この「学校建築」に近代建築のオーソドックスなどと思われる方法を生真面目に履行したのである。その場合、きびしい条件のもとで、時の推移があっても、できるだけ美的効果が傷われないように、「roughness」なデザインを目指したのである。

## § 試験的な基礎構造も話題に

最後に、『連子』以外から、建設に関する構造的な側面の記録を紹介する。土質工学会(現在は地盤工学会)の機関誌『土と基礎』1960年4月号に、加藤渉先生による「新しい基礎形式」と題した、5号館のシェル基礎に関する記事が掲載されている。5号館



では、意匠面だけでなく、構造面でも新しい技術が用いられていた。

一般に構造家は上部構造のデザインには心血を注ぐが、事一たび基礎の話となると十年一日の如く誰がデザインしたか知らないがあのコンクリートの塊のようなフーチングを何んの反省もなくそのまま使っていることは全く不思議なことと筆者は常に考えていたことである。(中略)

曲った板の事をすべて曲板(shell)というのであるが、例えば平板のベタ基礎の代りに曲板のベタ基礎を使った方がコンクリートや鉄筋が経済的に行きそうだとすることは力学の専門家でなくても大体判ることと思う。(中略)

筆者は昨年日大理工学部の5号館のベタ基礎にこの円筒曲板基礎を使用してみた。(中略)横スパン6.2m、縦スパン7.5mの4並列2連続円筒曲板基礎である。(中略)曲板は厚さ60cmとした。(中略)施工は(中略)曲板であるがために特別手間がかかることはないようである。(中略)曲板にした方がコンクリート量約2割、鉄筋量約3割程度節約になる。



## 齋藤賞・加藤賞・桜建賞 2017年度受賞者一覧 ＊受賞作品の紹介は次号に掲載いたします

### 齋藤賞

中栗田道 (理工学部建築／修士論文)  
「拡散体の散乱係数測定法の提案と設置方法が室内音場に及ぼす影響」  
指導／教授・橋本修、教授・羽入敏樹、准教授・星和磨

黒田竜司 (理工学部建築／修士論文)  
「免震構造設計方法に関する研究-層せん断力係数及び応答加速度に対応した応答性能設計図表-」  
指導／教授・秦一平

古田莉香子 (生産工学部／修士論文)  
「インドネシア・スラバヤにおけるカンボン住居の変容とその整備手法に関する研究」 指導／教授・廣田直行

申銘規 (工学部／修士論文)  
「中山間過疎地域における単独世帯員の居場所とその利用実態に関する研究」 指導／准教授・浦部智義

### 加藤賞

沖野貴久 (理工学部海洋建築工／修士論文)  
「剛性偏心を有する滑り基礎構造建物の地震応答性状に関する研究」  
指導／教授・北嶋圭二、特任教授・中西三和、名誉教授・安達洋

橋本佳樹 (理工学部海洋建築工／修士論文)  
「密度および形状の異なる材料により形成される海浜地形の比較に関する研究」  
指導／教授・小林昭男、助教・野志保仁、客員教授・宇多高明

宮下奈々恵 (理工学部海洋建築工／修士論文)  
「離島港湾における係留船舶の動揺と係留索張力の応答特性に関する基礎的研究」  
指導／教授・居駒知樹、准教授・惠藤浩朗、特任教授・増田光一

### 桜建賞

岡庭拓也、中津尚雄 (理工学部建築／卒業論文)  
「鉄道高架下保育園の音・振動環境に関する実験的検討」 指導／准教授・富田隆太、特任教授・井上勝夫

阿久戸信宏、浅香光平 (理工学部建築／卒業論文)  
「リアルタイムオンライン応答試験システムの構築」 指導／教授・秦一平

松田麻未 (理工学部建築／卒業論文)  
「六角形格子により構成されたケーブルネット構造の基本的構造特性に関する研究」  
指導／教授・岡田章、教授・宮里直也、助教・廣石秀造

塚本留加 (理工学部建築／卒業論文)  
「茨城県に現存する茅葺き民家の屋根葺き技術に関する一考察-現地調査と茅葺き職人への聞き取りを中心として-」 指導／教授・重枝豊、助手・加藤千晶

中川紗里奈 (理工学部建築／卒業論文)  
「ホワイトキューブの登場背景に関する研究」 指導／教授・佐藤慎也、助手・堀切梨奈子

伊勢萌乃 (理工学部建築／卒業設計)  
「身体を通過する建築-身体と建築の関係を目指して。建築空間における細部の可能性-」 指導／教授・田所辰之助

### 桜建賞

永野恭史、藤田勇汰 (理工学部海洋建築工／卒業論文)  
「折返しブレースの座屈拘束メカニズムに関する研究」  
指導／教授・北嶋圭二、特任教授・中西三和、名誉教授・安達洋

土橋大輔 (理工学部海洋建築工／卒業論文)  
「米国における水上住居の法制度整備の動向に関する調査研究-ワシントン州シアトル市およびカリフォルニア州サウサリート市を対象として-」 指導／教授・畔柳昭雄、助教・菅原遠

目野玄也 (理工学部海洋建築工／卒業論文)  
「一宮海岸における養浜効果の検証に関する研究」 指導／教授・小林昭男、助教・野志保仁、客員教授・宇多高明

小室昂久 (生産工／卒業設計)  
「烈風のマディーナ-大地を纏い広がる街-」 指導／教授・岩田伸一郎

小野詩織 (生産工／卒業設計)  
「・・・テミル。-人生をリセットする探索と思考の水族館-」 指導／教授・廣田直行

香取昂希 (生産工／卒業論文)  
「N. John Habraken の文献から見る持続可能な建築再生の方法論」 指導／教授・廣田直行

長島美幸、吉岡幸吉 (生産工／卒業論文)  
「プレ・ループ寺院における排水性能と伽藍の現状にみる水処理に関する一考察」  
指導／教授・塩川博義、助教・小島陽子

古矢晴香 (生産工／卒業論文)  
「石綿含有仕上塗材の除去作業に関する研究-剥離剤工法で使用される剥離剤の性能評価-」  
指導／准教授・篠崎健一、准教授・永井香織

柳沼明日香 (工学部／卒業設計)  
「モヤイの航海-塩から始まる島の未来-」 指導／准教授・浦部智義

桐生翔太 (工学部／卒業論文)  
「テンセグリティ構造の振動特性-SEMを用いた固有値解析-」 指導／教授・Buntara S. Gan

涌井凜太郎 (工学部／卒業論文)  
「バクテリア併用セルロース繊維混入モルタルによるひび割れの自己治癒機能に関する基礎的研究」  
指導／准教授・Sanjay PAREEK

山上雅稔、岡部志保 (工学部／卒業論文)  
「日本の建築構造・設備設計者の職能に関する歴史的研究」  
指導／教授・速水清孝、助教・山岸吉弘

阿部翼、日比将斗 (工学部／卒業論文)  
「都市公園におけるパークマネジメントに関する調査研究」 指導／専任講師・市岡綾子

藤井英 (短期大学部／卒業研究・設計)  
「阿佐ヶ谷伝土村-高架下へ導く辻路コミュニティ-」 指導／教授・矢代眞己、助手・高田康史

松本夏輝 (短期大学部／卒業研究・論文)  
「身近な粘性体を利用した小規模制震実験」 指導／助教・廣石秀造



## オール日大建築系 2017年度 授与賞・受賞者一覧

**理工学部建築学科・理工学研究科建築学専攻**

[ 齋藤賞 ]

環境系および構造系分野の優れた修士論文に対し、齋藤賞基金に基づき、桜門建築会より授与。元日本大学副総長、理工学部長であった齋藤謙次先生の高い業績を称えて設けられた。

**\* 10 ページ参照**

吉田鉄郎先生

[ 吉田鉄郎賞 ]

設計・計画系分野の優れた修士論文および修士設計に対し、駿建賞基金に基づき、建築学科教室より授与。本学の設計教育の礎を築かれた建築家であり、かつ日本の建築文化の優れた論考を残した吉田鉄郎先生の業績を記念して命名。

- PHAN THANH TUNG 「ハノイ文廟群の伽藍変遷からみた各建物の造営年代の研究 - 黎明後期から現在までの史料再検討と実測データを用いた分析 -」〈修士論文〉指導：重枝豊教授
- 添田魁人「既存形態の構成を援用した福島県白河市白河市中心公民館の建替計画 - 再生建築における建築的部位と空間構成に関する分析を通じて -」〈修士設計〉指導：佐藤慎也教授、古澤大輔助教

駿建賞

[ 駿建賞 ]

環境系および設計・計画系分野の優れた修士論文および修士設計に対し、駿建賞基金に基づき、建築学科教室より授与。

- 池田光「住空間における固体音発生源の動的加振力特性に関する検討」〈修士論文〉指導：冨田隆太准教授、井上勝夫特任教授
- 小川慶一郎「被災した鉄骨ブレース補強 RC 造建物の地震応答解析に基づく損傷状態の検証」〈修士論文〉指導：長沼洋一教授、田嶋和樹准教授
- 河野圭一郎「偏心 RC 造骨組の非線形性を考慮したねじれ応答評価と設計手法の提案」〈修士論文〉指導：長沼一洋教授、田嶋和樹准教授
- 本藤洋介「中間層連結制震システムの設計方法に関する基礎的研究 - 連結層設定指標の提案 -」〈修士論文〉指導：秦一平教授
- 小池健之「テンションリングを有する放射型ケーブル屋根構造の力学性状に関する基礎的研究」〈修士論文〉指導：岡田章教授、宮里直也教授
- 大川碧望「市民の美術表現の場に関する研究 - 公共施設の貸しギャラリーを通して -」〈修士論文〉指導：佐藤慎也教授
- 下村耀子「美術館の改修工事に関する研究」〈修士論文〉指導：佐藤慎也教授
- 小山 恭史「グラフィティ・ライターの活動領域に基づく誘引空間を用いた設計手法の提案 - 板橋区立中央図書館移転計画を事例として -」〈修士設計〉指導：佐藤光彦教授
- 野下啓太「都市と水辺を繋ぐ地域施設の設計 - 参道の橋梁化及び地域コミュニティの活性化を目的とした文化交流発信拠点の提案 -」〈修士設計〉指導：今村雅樹教授

桜建賞

[ 桜建賞 ]

優れた卒業論文および卒業設計に対し、桜門建築会より授与。

**\* 10 ページ参照**

駿優賞

塚越未来

[ 駿優賞 ]
優れた卒業論文および卒業設計に対し、駿建賞基金に基づき、建築学科教室より授与。

- 塚越未来、吉本尚世「木造建築物を対象とした重量床衝撃音

毎年卒業の時期に、大学院生、学部生の勉強の成果を顕彰する各種の賞が決定する。ここでは 2017年度に授与した学生とそのタイトルを、一覧にして紹介する。

井上勝夫先生

近藤壮一郎

の発生系及び対策方法に関する研究」〈卒業論文〉指導：井上勝夫特任教授

- 近藤壮一郎、安田貴則、大木建人「セメント安定処理砂の強度・変形特性に関する実験的研究 - 長期材齢（材齢 20 年）の試験結果 -」〈卒業論文〉指導：山田雅一教授、道明裕毅助手
- 藤下大知「在来型枠工法におけるスラブ下および梁下の支保工の存置方法に関する実態調査」〈卒業論文〉指導：中田善久教授、宮田教典助手
- 月東雄規「ECC 平板部材の非線形有限要素解析」〈卒業論文〉指導：長沼一洋教授、田嶋和樹准教授、
- 諸角竜之介「鉛直荷重に対する張弦梁構造の弾塑性挙動に関する実験的研究」〈卒業論文〉指導：中島肇教授、石鍋雄一郎助教
- 大塚凜「世田谷区指定文化財安藤家住宅主屋の復元平面に関する一考察 - 関東地方における民家の平面形式の分析を中心として -」〈卒業論文〉指導：重枝豊教授、加藤千晶助手
- 山本向希「機能分析にもとづく東京中央郵便局の空間構成の再検証とモダニズム建築としての評価 - 通信及び郵便事業の発展と郵便局舎における平面計画の変遷を通して -」〈卒業論文〉指導：田所辰之助教授
- 本田偉大「アジアタウン構想 - 移民 1000 人の営みでできた建築 -」〈卒業設計〉指導：今村雅樹教授

奨励賞

今村雅樹先生

- 奨励賞 ]
優れた修士論文および優れた卒業論文・卒業設計に対し、理工学部校友会からの寄金に基づき、建築学科教室より授与。
- 石井拓朗「オープンプランオフィスにおける漏洩対話音による妨害を考慮した執務者の作業性評価と物理評価法に関する研究」〈修士論文〉指導：橋本修教授
- 中村咲瑛子「ETFE フィルムを用いた密閉型レンズ状二重空気膜構造の基本的力学性状に関する研究 - 過大な負圧荷重時と繰り返し荷重時の挙動の把握 -」〈修士論文〉指導：岡田明教授、宮里直也教授
- 松田祐也「RIA における設計手法の発展過程とその建築理念に関する研究 - 1950-60 年代における RIA の住宅作品の分析を通じて -」〈修士論文〉指導：田所辰之助教授
- 増田靖、小館葵「共同住宅の小屋裏を介した迂回路伝搬系の試験装置における提案と検証」〈卒業論文〉指導：井上勝夫特任教授
- 村山リサ、原聡大「少雪地域の雪荷重評価における降雪と気象データに関する基礎的研究」〈卒業論文〉指導：中島肇教授、石鍋雄一郎助教
- 藤田歩「エイジングインプレイスの実現へ向けた高齢者の散歩経路に関する研究 - 荒川区 A 老人福祉センター利用者を対象として -」〈卒業論文〉指導：山中新太郎准教授
- 力武瑞穂「建築碑」〈卒業設計〉指導：田所辰之助教授

**理工学部海洋建築工学科・理工学研究科海洋建築工学専攻**

[ 加藤賞 ]

もともと優れている修士論文に対し、桜門建築会より授与。海洋建築工学科を創設された元理工学部長の加藤渉先生の功績を称えて設けられた。

**\* 10 ページ参照**

桜建賞

[ 桜建賞 ]

**\* 10 ～11 ページ参照**

海建優秀賞

唐崎雄亮

黄起範

- 黄起範（HWANG Lino）「大洋の湊舟城- 自己拡張する洋上都市の提案 -」指導：佐藤信治専任講師
- 唐崎雄亮「鉄道線路が津波避難に及ぼす影響に関する研究 - 全国沿岸の鉄道事業者が行っている対策の現状 -」指導：桜井慎一教授、寺口敬秀助手

海建賞

- 海建賞 ]
- 蒔苗嘉人「鎌倉市由比ヶ浜における新規津波避難施設の配置計画に関する基礎的研究」〈修士論文〉指導：居駒知樹教授、惠藤浩朗准教授、増田光一特任教授
- 伊佐野末季、澤村晴香「三番瀬における放射能汚染について」指導：大塚文和准教授、川西利昌名誉教授
- 山口兼右「東京湾における生態系ネットワークに関する基礎的研究」指導：大塚文和准教授
- 中村隆浩「循環型浄化システムにおける微生物活性剤の投入時刻に対する浄化性能比較」指導：岡本強一准教授
- 藤山翔己「アグリカルチャー・リサーチコンプレックスセンター - 築地市場跡地計画として食文化発信施設群計画 -」指導：小林直明教授
- 櫻井郁斗「円筒形タンク内の液面動揺に関する非線形数値解析」指導：近藤典夫教授
- 小林将斗、斉田健志、藤浪由揮、吉崎駿之介「PC 梁のせん断終局強度推定式の適用範囲拡大に関する実験的研究」指導：福井剛准教授、浜原正行非常勤講師
- 福島巧理「レジャーボートの利用実態から見る利用率向上に関する調査研究」指導：山本和清専任講師、近藤健雄名誉教授

生産工学科

**生産工学部建築工学科・生産工学研究科建築工学専攻**

[ 齋藤賞 ]

**\* 10 ページ参照**

金井賞

[ 金井賞 ]

優れた修士論文に対し、建築工学専攻より授与。元日本大学副総長、生産工学部長の金井清先生が地震学で高い業績（朝日賞受賞）を上げたことを称え、昭和 55 年度から設けられた。

- 奥山誠也「ファインパブル混入による粘性土改良体の品質改善に関する基礎的研究」指導：小松博教授

桜建賞

[ 桜建賞 ]

**\* 11 ページ参照**

卒業論文賞

川鍋賢人

- 卒業論文賞 ]
優れた卒業論文に対し、建築工学科より授与。平成 26 年度に設けられた。
- 川鍋賢人「地盤改良体の品質改善に関する研究 - 粘性土と固化材粒子のゼータ電位 -」指導：下村修一専任講師
- 河地駿介、二神原具維、木原峻「実在する柔構造建物の振動特性に関する研究」指導：藤木利昭教授
- 五十嵐八雲、塩畑涼、高橋良汰、高松忍、多田宏希、二瓶翔馬、宮口寛「昭和初期から残る 2 棟の大型木造建築物に関する調査」指導：鎌田貴久専任講師
- 外山純輝「『奥』を感じる空間の特徴の特徴 - 埼玉県川越市 都市景観形成地域を対象として -」指導：篠崎健一准教授
- 黒沢進之介、伊達航大、福川碧都「梵鐘における発音および音の伝搬性状に関する研究 - 真栄寺の梵鐘を例として -」指導：塩川博義教授

[UIA 記念賞]

優れた卒業設計に対し、建築工学科より授与。昭和 53 年国際建築家連合主催の国際コンペでフランス建築アカデミー賞、昭和 56 年エジプト賞およびワルシャワ建築計画局賞の受賞を記念して、昭和 56 年度から設けられた。

- 松井裕作「解体の庭 - 家の集集体から部屋の集集体 -」指導：岩田伸一郎教授

卒業設計賞

渡辺康教授

- 卒業設計賞 ]
優れた卒業設計に対し、建築工学科より授与。平成 26 年度に設けられた。
- 向佐葉奈子「根づく壁、流れる時、変わらぬ光景。」指導：渡辺康教授
- 池田光「19000 m慰霊碑 - 大空に憧れた少年たち -」指導：岩田伸一郎教授
- 深澤翔平「のんべ路地」指導：篠崎健一准教授
- 大沼謙太郎「邂逅する十一ノ景 - 酒蔵が醸造する世界 -」指導：岩田伸一郎教授

中国科技大学

[ 中国科技大学特別賞 ]

学部と学術提携締結にともない 2012 年度より設けられた賞。台湾の中国科技大学規劃設計學院より授与される。

- 外山純輝「拝啓○○様 - 時に囲まれたあなたの場所 -」指導：篠崎健一准教授

工学部

**工学部建築学科・工学研究科建築学専攻**

[ 齋藤賞 ]

**\* 10 ページ参照**

北桜賞

[ 北桜賞 ]

優れた修士論文に対し、建築学専攻より授与。

- 岡田明也「塩化物イオン固定化材混入断面修復材料及びそれを用いた工法のマクロセル腐食抑制効果」指導：出村克宣教授

桜建賞

[ 桜建賞 ]

**\* 11 ページ参照**

短期大学部

**短期大学部建築・生活デザイン学科**

[ 桜建賞 ]

**\* 11 ページ参照**

自主創造賞

羽入敏樹先生

[ 自主創造賞 ]

優れた卒業論文および卒業設計に対し、理工学部校友会建築部会からの寄金に基づき、建築・生活デザイン学科と校友会建築部会より授与。

- 山内颯「わんどの庭 - 海・工芸・ひとが結ばれる場所 -」指導：羽入敏樹教授、高田康史助手

奨励賞

宇津里緒奈

- 奨励賞 ]
優れた卒業論文および卒業設計に対し、建築・生活デザイン学科より授与。
- 宇津里緒奈「ふれあいの種 ～クラインガルテンが築く人々の輪～」指導：山崎誠子准教授
- 岡田知子「介護福祉施設におけるドールセラピー導入効果に関する検討」指導：吉野泰子教授
- 小山侑華「固化系柱状改良地盤の荷重変位関係に関する研究」指導：酒句教明准教授
- 中園崇仁「逆さ吊り模型を用いたシェルの形状形成及び鉛直載荷実験」指導：廣石秀造助教
- 平田唯「LINKAGE -地域に根付く、働く場所の新しいかたち-」指導：矢代眞己教授、高田康史助手

<sup>[1]</sup>



# 事務局だより

## 平成30年度の桜門建築会総会のご案内



案内図/JR御茶ノ水駅、地下鉄丸の内線御茶ノ水駅、地下鉄千代田線新御茶ノ水駅より、徒歩約5分程度

来たる5月29日(火)に平成30年度の桜門建築会総会を、東京ガーデンパレスにて開催いたします。会員の皆さまは、どなたでもご出席で

きますので、ふるってご参加ください。なにかご不明な点がありましたら、HPをご覧くださいか、下記事務局までお問い合わせください。

日時/平成30年5月29日(火)  
総会・18:00～懇親会・19:00～  
会費/8000円 会場/東京ガーデンパレス

## 平成29年度 秋季ゴルフ大会開催

昨年11月9日(木)に、武蔵松山カントリークラブで、桜建会秋季ゴルフ大会が開催された。参加者は

13名、天候にも恵まれ元気にプレーをすることができた。終了後はパーティーで表彰式を行い、親睦を深める会話を楽しみ、盛会に終わった。優勝者は岸本孝一氏であった。(理工院H5卒 石井要憲)



## お詫びと訂正

110号に掲載しました小林美夫先生の追悼文中、本来は日本大学名誉教授とすべきところ、元理工学部教

授と表記してしまいました。ここに表記を訂正し、関係者の方々にお詫び申し上げます。

## 新入特別維持会員のご紹介

新規入会者 氏名/卒業年/勤務先 (平成29年11月8日～平成30年1月31日) 7名

橋本 修	理工建 -61	日本大学理工学部	安藤 暢彦	理工建 -56	(株) マルタ設計
山岸 左千夫	理工建 -57	ワイズ建築設計事務所	北口 雄一	理工建 -57	大成建設(株)
後藤 茂	理工建 -55	G設計 一級建築士事務所	江副 進	理工建 -54	(株) 久米設計
太田 宏	理工建 -H19	鹿島建設(株)			

## 賛助会員入会企業のご紹介

新規入会法人名 (平成29年11月8日～平成30年1月31日) 2社

総合設計株式会社 株式会社シミズ・ビルライフケア

桜建会報 NO.111 2018-March  
発行人 斎藤公男  
編集 桜門建築会広報委員会  
〒101-8308 千代田区神田駿河台1-8-14  
日本大学理工学部内

広報委員会  
委員長 佐藤慎也(理工学部建築学科)  
副委員長 塩川博義(生産工学部建築工学科)  
矢代真己(短期大学部建築・生活デザイン学科)  
委員 大川三雄(理工学部建築学科)  
山本和清(理工学部海洋建築工学科)  
亀井靖子(生産工学部建築工学科)  
齋藤俊克(工学部建築学科)  
北川健太(セカイ)  
大西正紀(mosaki)  
西山麻夕美(フリー編集者)

桜建会事務局  
住所・所属の変更、クラス会の開催、投稿、会費、名簿など桜建会全般についてお気軽にご連絡、お問い合わせください。  
理工学部5号館7階574A号室  
TEL03-3259-0649 FAX03-3292-3216  
E-mail kaiin@okenkai.jp  
ホームページ http://www.okenkai.jp/  
専任/星野麻衣子  
非常勤/櫻井佐和、大木明子  
業務時間/AM10:00～PM5:00(月～金)

# 学部ニュース

## 理工 海洋建築工学科トピックス

◎新宮清志名誉教授は、日本建築学会「歴史的価値を有する大規模木造宿泊施設の安全性能確保特別調査委員会」委員長(2017年4月～)を務めており、花里利一教授(三重大学)・森山修治教授(日大工学部)・後藤治教授(工学院大学)・鯉坂徹教授(鹿児島大学)・八木真爾博士(佐藤総合計画)・大石泰生氏(富士屋ホテル)・長谷見雄二教授(早稲田大学)他とともに、12月19日、建築会

「木造旅館の未来を考える」シンポジウムの資料表紙



館ホールにおいて、シンポジウム「木造旅館の未来を考える」歴史的価値を有する大規模木造宿泊施設の安全性能を如何に確保するか」を実施した。今後、特別調査委員会は、傘下の4つの小委員会と連携をとりながら、書籍『歴史的大規模木造宿泊施設の安全性能確保の考え方・同解説』(仮題)刊行に向けて、活動を行う予定である。



高須君の「街の小さな振り所」

## 理工 建築学科トピックス①

◎「2017年度日本建築学会大会学術講演会シェル・空間構造部門」(主催/日本建築学会シェル・空間構造運営委員会)で、永峰馨君(空間構造デザイン研、M2)の「四辺単純支持された建築用板ガラスの耐風圧強度に関する基礎的研究 その4 板厚が破壊荷重と許容耐力に及ぼす影響について」と、山崎由美子さん(鋼構造・対雪設計研、M1)の「構造用ケーブルの応力-ひずみ関係に関する実験的研究」が「若手優秀発表賞」を受賞した。

◎「千代田区を舞台にした学生設計展2017」(主催/日本建築家協会千代田地域会)で、本田偉大君(今村研、4年)の「神田カルチュラタン」、田村隼人君(同左)の「排からの脱却」、長谷川謙人君(佐藤光彦研、4年)の「Takebashi REVIEW」がそれぞれ「学生優秀作品賞」を受賞した。これは、都心の都市環境にふさわしい建築の未来像を探求することを目的に毎年開催されている。

◎「IAUD 住宅学生コンペ」(主催/国際ユニヴァーサルデザイン協議会)で、高須信博君(山崎研、4年)の「街の小さな振り所」が「入賞」を受賞。テーマは「ゼロからつくる日本の住まい」で、ユニバーサルデザインの基本を踏まえ、快適で達成感がある暮らしを実現することを目標とした「UDプラス」への提案が求められた。

## 工 トピックス①

◎Buntara S.Gan 教授は8月1日から12月31日まで、インドネシアのCivil Engineering Department Diponegoro Universityの客員教授を委嘱された。

◎9月11日、新潟市の東区プラザで「防災学習会～建築学生の観点から～」が開催された。会長の後藤寛尚君(速水研、3年)をはじめとする建築研究会災害対策研究班が講演した。

◎10月14日、「日本造園学会東北支部第17回支部大会ポスターセッション」で、相田快君(市岡研、M1)が優秀学生賞を受賞した。

◎市岡綾子専任講師と市岡研究室は、10月20日須賀川市議会からの依頼により制作した議場パンフレットの完成報告を、須賀川市議会議長などの関係者に行った(須賀川市議会議長佐藤瞭二氏は本学科OB)。



左/須賀川市の議場パンフレットの完成報告をした市岡専任講師と市岡研究室の学生、市議会議長の佐藤氏。右/新潟市の「防災学習会」で講演した建築研究会災害対策研究班のメンバー

## 短大 トピックス

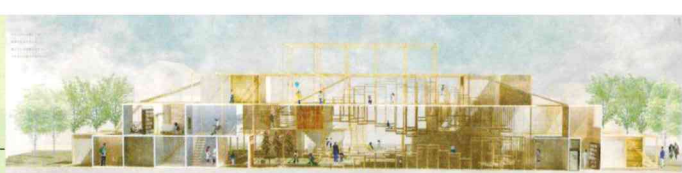
◎吉野泰子教授は、11月、中国天津市から、王岩天津城建大学教授との日中共同研究成果「介護福祉施設の温熱環境実態調査」の成果と施策に対し感謝状を拝受した。また、11月3日、船橋市市制施行80周年記念式典において船橋市より特別功労賞を受賞。さらに、これらの功績を受けて、今年度日大理工学部学会・協会賞を授与した。

◎高田康史助手は、「津島市天王通り再生プラン提案競技」(主催/津島市)で佳作を受賞した。駅から神社まで約1kmの天王通りを津島神社への参道に見立てて、賑わいを創出する地域活性がテーマ。応募案の「津島結び」は、祈願コミュニティを軸に展開された事業運営・交流コンセプトが高く評価された。

高田助手の「津島結び」のプレゼンテーションの一部







◎「第11回 長谷工住まいのデザインコンペティション」(課題/空き家とつながる集合住宅)で、松枝朝さん(大内研、M1)と横田宙さん(千葉大学・M1)との共同作品「学び舎の街」が、佳作に入選した。  
 ◎「シェルターインターナショナル学生設計競技 2017」(課題「現代における commons の再構築」)で、日野一貴君(岩田研、M2)、坪井里穂さん(同左)、山崎悠祐君(同左)、小室昂久君(同4年)の「藁ノ廟 -strawcemetery-」が、

優秀賞(第2位)に選出された。  
 ◎「住宅課題賞 2017」(主催/東京建築士会)の入選作品展が、ギャラリーエークウッド(竹中工務店東京本店内)で行われ、高野真美さん(建築デザインコース)、渡邊健太郎君(建築総合コース)、堀内那央さん(居住空間デザインコース)の作品が展示された。その内、堀内さんの「間の家」が、審査員「小西泰孝賞」(第4位)を受賞した。

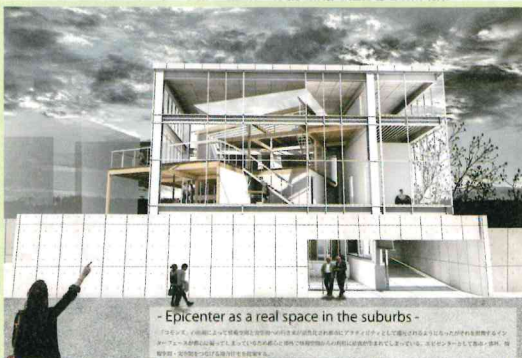


上/松枝さん、横田さんの「学び舎の街」 中/岩田研グループの「藁ノ廟」 下/堀内さんの「間の家」

◎「未来のとびらコンテスト 2017 <大学生版>第3回学生デザインコンペ」(主催/三協立山 三協アルミ社)で、増田俊君、村岡祐美さん、平間裕大君(今村研、M1)の「まちを巡る学び舎」が「優秀賞」、太田みづきさん(今村研、M2)の「地形に寄り添う門前町 1300年の時をつなぐ、にぎわいのスロープ参道」が「優秀賞」および「三協アルミ賞」を受賞した。テーマは「ずっといたく

なるまち」。  
 ◎「第13回ダイワハウスコンペティション」(主催/大和ハウス工業)で、小野良希君(古澤研、M1)の作品「-Epicenter as a real space in the suburbs-」が佳作を受賞した。テーマは「過渡期の家」。

◎10月22日、「日本インテリア学会 24 回卒業設計展」で佐々木浩祐君(浦部研・17年度卒)の「犬の散歩にZ軸を -バイリンガルな建築-」が最優秀賞を受賞した。  
 ◎10月27日、「第21回東北建築学生賞」(主催/日本建築家協会)で、柳沼明日香さん(浦部研、4年)の「鼓動する橋」が最優秀賞を受賞した。  
 ◎12月14日、「TOHOKU + N YOUTH DESIGN AWARD 2017」(主催/シエルホームデザイン、ホリエ)で、福田晴也君(浦部研、4年)の「蒼の学校 -縮小地域のたたみ方の提案-」が最優秀賞、藤村皓也君(同左)の「Artist in Heritage」、柳沼明日香さん(同左)の「揺れる蔵、動く蔵」と寺沢鳳成君(速水研、3年)の「Velarium -再建の幕明けを告げる-」が佳作を受賞した。



上左/増田君、村岡さん、平間君の「まちを巡る学び舎」 上右/太田さんの「地形に寄り添う門前町」 下左/小野君の「-Epicenter as a real space in the suburbs-」



左上/柳沼さんの「鼓動する橋」 左下/佐々木君の「犬の散歩にZ軸を」 右下/福田君の「蒼の学校」

